



2018年3月12日

左派オブラドール氏が優位に立つメキシコ大統領選

公益財団法人 国際通貨研究所
経済調査部 上席研究員 森川 央

メキシコでは、大統領選挙が迫ってきている。7月1日の投票まで3カ月余り。ここまで優位に立っているのは、左派政党である国家再生運動(Morena)を率いるオブラドール候補である。

ニックネームは名前(Andres Manuel Lopez Obrador)の頭文字を並べて「AMLO」。大統領選は3度目の挑戦である。2月28日に実施された最新の世論調査によると支持率は39%、2位のアナヤ候補(30%)を9ポイント引き離している。

追うアナヤ候補は中道右派の国民行動党(PAN)所属、次いで現与党である制度的革命党(PRI)のミード候補が24.5%と続く。彼らはどちらもメキシコ政界を主導してきた政党の候補者であり、メインストリーム、エスタブリッシュメントである。

だが、メキシコでも既存政党離れが進んでいる。その理由は、①グローバル化はメキシコでも格差拡大の原因と感じられており、多数の国民が置き去りにされていると感じていること、②公約の汚職撲滅は実現できるどころか、大統領に近いグループの汚職が露見していること、③過去最悪ペースで殺人事件が発生するなど、治安はますます悪化していること、などである。

「右も左も既存政党は、国民を置き去りにして私腹を肥やすだけだった」という不満がついに噴き出し、アウトサイダーに救済を求める。米国でトランプ旋風を生み、英国でEU離脱を選ばせたのと同じ構図がメキシコでも見られる。

オブラドール氏は、元々もう一つの既存政党で中道左派の民主革命党(PRD)に属していたが、党を飛び出しMorenaを立ち上げた。新人とはいえないオブラドール氏だが、既存政党の枠組みに留まらなかったことが、有権者に好意的に受け止められているのだろう。

決選投票制度のないメキシコでは、過去2回の大統領選での当選者の得票率はそれぞれ36%、38%であった。オブラドール氏が世論調査通りの得票率を得れば、十分に勝機がある。当初、オブラドール氏当選はサブ・シナリオ扱いだったが、今やメイン・シナリオとなった観がある。

オブラドール氏が実際にどのような政策を打ち出してくるかは不透明である。北米自由貿易協定（NAFTA）に全面的に反対するとは考えにくい、自由貿易には左派の立場から反対しており、何らかの修正を表明する可能性がある。また、トランプ大統領の米国第一主義に対し、メキシコ第一主義を唱えており、両者の「対決」が新たなリスクになることも考えられる。いずれにせよ、世界経済に「見えない」要因が加わると考えておくべきだろう。

以上

当資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、何らかの行動を勧誘するものではありません。ご利用に関しては、すべてお客様自身でご判断下さいますよう、宜しくお願い申し上げます。当資料は信頼できるとされる情報に基づいて作成されていますが、その正確性を保証するものではありません。内容は予告なしに変更することがありますので、予めご了承下さい。また、当資料は著作物であり、著作権法により保護されております。全文または一部を転載する場合は出所を明記してください。